

令和 5 年 6 月 24 日現在

機関番号：13401

研究種目：若手研究(A)

研究期間：2015～2022

課題番号：26704009

研究課題名(和文)形態学・技術学・分業論からみたアジア沿岸地域の紡織考古学研究

研究課題名(英文)The Archaeological Study on Spinning and Weaving in Asian Coastal Areas from the Perspective of Morphology, Technology, and the Division of Labor

研究代表者

東村 純子(Higashimura, Junko)

福井大学・学術研究院教育・人文社会系部門(総合グローバル)・准教授

研究者番号：10465601

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 7,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、古代日本の遺跡出土の織物と紡織具の形態学的分析と技術復元を進め、製糸・製織の分業や生産の担い手、織物の流通の実態を明らかにし、その社会的・文化的特質を見出すことを目的とした。

まず、麻と絹それぞれの紡織技術の特徴をみるために、糸や織物組織の形態観察を行った。続いて、日本及びアジア沿岸地域の紡織にかかわる考古資料や民俗・民族資料に基づき織成実験を行い、紡織具の型式や用法、織物の規格について検証した。さらに、腰機で布を織る女性を表した機織形埴輪や紡織に関わる文字資料、祭祀にかかわる紡織具等を総括的に検討し、女性労働としての織物生産をとりまく古代社会の諸相を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

古代日本では、麻や絹を素材とする織物が衣料としてのみならず、交換財としても流通し、製糸と製織の工程からなる「紡織」は、社会経済を支える基幹的な手工業であった。しかし、遺跡から出土する織物や紡織具は断片的で、その資料的制約のため、技術や生産体制についての議論が不十分であった。

本研究では、出土織物・紡織具の形態分析、アジア沿岸地域の考古資料、民俗・民族資料との比較による技術復元を行うことで、古墳時代後期から律令時代までの紡織技術の変化や生産体制の特徴、調庸物として納める織物の規格、公的な文献史料に表れにくい女性労働の実態について新たな知見を得ることができた。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to conduct morphological analysis and technological reconstruction of textiles and spinning and weaving tools excavated from archaeological sites, to clarify the production system and the circulation of textiles, and to discover the social and cultural characteristics in Ancient Japan.

First, I observed and analyzed the morphology of yarns and textile structures in order to examine the characteristics of spinning and weaving techniques of ramie, hemp, and silk. Then, I conducted weaving experiments based on archaeological and ethnographic materials in Japan and other Asian coastal areas and examined the type and usage of spinning and weaving tools and textile standards. In addition, I researched on Haniwa expressed women weaving cloth on back-strap looms, textile-related written materials, and spinning and weaving tools used in rituals comprehensively to clarify various aspects of ancient society surrounding textile production as women's labor.

研究分野：考古学

キーワード：紡織 織物 腰機 女性 古墳時代 律令時代

## 様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

古代日本では麻や絹を素材とする織物が衣料としてのみならず、交換財としても流通し、製糸と製織の工程からなる「紡織」は社会経済を支える基幹的な手工業であった。これまで、紡織にかかわる研究は、①紡錘や木製紡織具の形態・用途についての考古学的分析、②文献史料にみる律令時代の織物生産体制の検討、③文化財科学の手法による繊維分析、④染色や織り技法の実験・復元等に大別でき、それぞれの分野で蓄積されてきた。

報告者はこれまで考古学の遺跡出土の各種紡織具の分析により、紡織技術や生産体制について研究を進めてきたが(東村純子 2011『考古学からみた古代日本の紡織』六一書房)、基本的な情報が不足している織物との関係が明らかでなかった。また、生産の担い手についても、技術の形態や分業体制を踏まえた多角的な視点からの議論が必要である。

出土織物については素材、組織、用途を総合的に研究する「繊維考古学」が提唱され、日本の出土繊維製品の集成が進められてきたが(沢田むつ代 2005「繊維考古学の可能性」『季刊考古学』91等)、織り技法等について紡織具の分析と合わせて検討した事例は数少ない。

また、近年、中国や韓国では埋葬墓や低湿地遺跡での紡織具や織物の出土例が増え、東南アジアではインドから中国南部までをネットワークとする織物の生産流通、技術交流の研究が進んでいる(J. Cameron 2006 “Uncovering Southeast Asia’s Past”, National University of Singapore 等)。このような背景から、中国大陸・朝鮮半島から東南アジアの沿岸部の地域(以下、アジア沿岸地域と呼ぶ)と比較した、古代日本の出土織物と紡織具の形態学・技術学・分業論の考古学的研究を進める。

### 2. 研究の目的

本研究は、古代日本の紡織技術と織物の生産流通の具体相について、出土織物と紡織具の形態学的分析を基軸に検討し、アジア沿岸地域との比較からその社会的・文化的特質を解明することを目的とする。まず、麻・絹それぞれの素材の織物と、紡織具について考古学の手法による調査を行う。織物の組織や糸の形態観察から得られる技術の特徴と、紡織具の型式や用法との対応関係を見出し、織物生産・流通の実態を追究する。続いて、出土織物と紡織具、紡織に関わる文字資料、織手の具体像を表す資料等を総括的に検討することで、性別分業による女性労働としての織物生産の諸相を明らかにする。

### 3. 研究の方法

弥生時代から律令時代までの出土織物と紡織具、関連する文献史料、及びアジア沿岸地域の紡織にかかわる考古資料、民俗・民族資料を対象とした調査を、以下の方法により行う。

#### (1) マイクロスコープによる出土織物の観察

遺跡から出土した織物についてデジタルマイクロスコープ等を用いて観察・記録を行い、糸の形態的特徴や織りの組織を確認する。麻と絹の素材別にみた差異を踏まえつつ、麻については平織の地合いの時期的変化、絹については綾等の各種組織の出現時期等について検討する。律令時代の織物については、正倉院に伝わる織物の近年の調査成果も参照し、検討を進める。

#### (2) 出土紡織具の集成と形態分析

遺跡から出土した木製の紡織具について、器種ごとに形態的特徴を把握し、写真撮影・実測等による記録を行う。特に、糸擦れ痕は、経糸を上下に開口する具や緯打具に残ることが多く、その状態を確認するとともに、これら紡織具の用法と出土織物との関係を検討する。また、古墳時代中期以降の土製模造品や古墳時代後期の機織形埴輪等の調査を行い、その形態的特徴について木製品と比較検討する。さらに、アジア沿岸地域の遺跡出土の織物や木製の紡織具について情報を収集し、古代日本の紡織技術との類似点・相違点をみる。

#### (3) 民俗・民族例にみる機の技術の調査と復元・織成実験

アジア沿岸地域の紡織にかかわる民俗・民族資料について、経糸がかけられた状態の機を中心に、糸の素材・機の型式・機の部材に残る使用痕等を確認し、写真撮影・実測等による記録を行う。考古資料と民俗・民族資料に即して機の部材を復元し、織成実験を行い、各部材の形態的特徴と用法、織手の動作等について検証する。

### 4. 研究成果

考古学からみた出土織物と紡織具の形態学・技術学・分業論の展開について、「技術」を基軸として、「形態」、「生産」、「女性」の3つのテーマに分けて、以下報告する。

#### (1) 技術と形態

《麻の製糸技術》 麻(大麻、苧麻)の繊維から糸を作るには、まず、手指で細長く裂いて撚りつなぐ「糸績み」、次に、紡錘などで糸全体に撚りをかける「糸撚り」の2つの工程がある。日本とアジア沿岸地域(韓国、台湾、ベトナム等)の民俗・民族例では、糸績みの技法として、2本の繊維を揃え、1本の糸に撚りつなぐ「2本揃え」等があるが、どの技法においても多くの場合、双方の繊維に右指でZ字方向、続いてS字方向に撚り合わせるといった基本は共通する。

このような麻の糸績み、糸撚りの技法を、弥生～古代・中世の織物についてマイクロSCOPEを用いた観察により確認するとともに、紡錘の形態や使用法を考察した。ここに一例として挙げる福井市一乗谷朝倉氏遺跡出土の鉄製紡錘は、紡莖にS字状の撚りがみられ、S字方向に回転して撚りをかけたことが確定できる。同遺跡出土の平織の織物についてみると、全体的に緩いS字状の「糸撚り」と、部分的に強く撚り合わせた「糸績み」が認められる。このS字方向の撚りは、弥生・古墳時代の麻の織物においても共通して確認できること、古墳時代後期から古代・中世にかけて、先端部にS字状の鉤をもつ鉄製紡錘が存在することから、通時的な技術であったと考えられる。

また、撚りをかけた糸は、工の字形に組んだ「栲」に巻き上げる。栲の大きさと巻き方により、「総」（糸束）の1周の長さが決まるが、日本や台湾の民俗・民族例では、麻素材の糸を扱うため、比較的大きな栲が使用される。そこで、弥生時代以降の遺跡から出土した栲について、同形のものを復元し、民俗・民族例を参照しつつ、使用法について検証した。

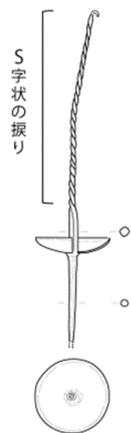
《絹の製糸技術》 絹の繊維は、蚕の繭から引き出したものである。麻の繊維にみられるような糸績みは行われなため、考古学的な見地から素材の判別がある程度可能である。また、絹糸は撚りがかけられていないものが大半で、織り密度も高いのが一般的である。

ただし、滋賀県彦根市稲部遺跡で出土した古墳時代前期の繊維製品は、元興寺文化財研究所による繊維の断面観察により、経糸が撚りのかかった絹糸であることが判明した。織り組織は、経三枚綾（綾杉文を構成）で黒漆が塗布されている。集落遺跡での出土でありながら、前期古墳に副葬された鞆を構成する織物と同じ特徴をもつ点が注目される。また、一部に別の織り組織もみられることから、織成実験を行い、織り技法について検討した。本例は、弥生時代に一般的な平織の絹とは糸譜の異なるものであり、今後検討の余地がある。この他、栃木市伯仲1号古墳出土の繊維製品（経錦等）、福井市龍ヶ岡古墳出土の繊維製品、福井市鼓山古墳出土の鞆等の調査を行った。

《機の構造と製織技術》 古代日本で使用された機として、腰機と高機とがある。腰機は主に麻素材の、高機は主に絹素材の織物を織成するために、それぞれに発達した技術であることを、アジア沿岸地域の考古資料や民族資料に基づき、考察した。

絹の繊維は柔軟で、性質上、色に染まりやすいことから、多彩な染色と複雑な組織により文様をあらわす技術が発達した。古代中国では経糸優位の高密度な平織の絹が織られたことが、「経錦」の発生につながったと考えられ、古代日本では7世紀後半までは経錦の、8世紀に入ると西方起源ではあるが、絹素材の緯錦の製法がもたらされたことが知られる。これを踏まえて、近年、中国の東周時代～漢代の遺跡（埋葬墓）から出土した製織にかかわる副葬品を取り上げ、機の形態とその変化について確認した。

腰機は、織手が腰の動きで経糸の張力を緩めながら織るため、硬直で撚りつないだところが切れやすい麻素材に適している。特に、輪状式の無機台腰機では経糸の配列を揃える「箴」がないために、経糸の配色や浮き沈みによる経糸優位の文様表現がよくみられる。これらの特徴を確認するため、台湾、ベトナム、ラオス等の民族例を調査した。さらに、上述した調査例を含む、弥生～古代・中世の織物について、織り組織の特徴と糸の素材、機の構造との関係について検討を進めた。



鉄製紡錘



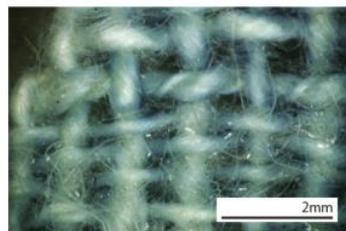
1. 平織の絹。縦方向の無撚りの糸に比べ、横方向の糸は太く不均一である。経糸には開口操作を妨げないよう、均一さが求められたのに対し、緯糸には綿織から紡いだものを利用したのだろう。(佐賀県吉野ヶ里遺跡、豊稲墓 SJ17 68 出土、弥生時代中期後半)



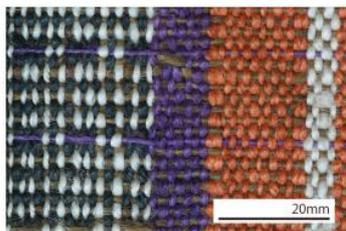
2. 取金具に遺存する経錦。鞆の底板である木質が付着した粗い麻布と、その布目の間から経錦がみえる。経錦は、麻布を下地とする鞆本体の袋の外装として用いられた。(栃木県伯仲1号墳出土、古墳時代後期)



3. 弥生時代の平織の麻布は、経糸の密度が高く、鏡のない輪状式無機台腰機で織られたとみられる。糸全体にS字方向の撚りがかけられ、右手で紡錘を転がしたことがわかる。(静岡県登呂遺跡出土、弥生時代後期)



4. 藍染された平織の麻布。絹は生葉のまま染めたが、発酵建てした藍であれば、麻布も染められる。S字状に糸に績んだところがみえる。直状式有機台腰機による織成か。(福井県一乗谷遺跡出土、中世)



5. 台湾タイヤル族の輪状式無機台腰機による麻布。経糸が密になるため、その配色によりあらわす経織を基本とし、一部、経糸の浮き沈みによる文様を織り出す。(西脇市郷土資料館蔵、現代)



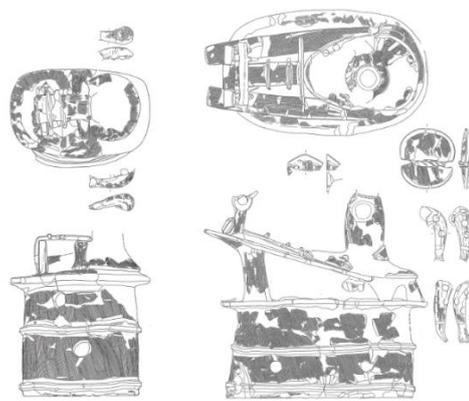
6. 5の一部拡大。手指でカラムシの繊維を糸を績み、長さ約40cmの竹棒からつくられた紡錘（踵は特に付かない）でS字方向に撚りをかける。

《機織形埴輪にみる紡織技術》 これまで、遺跡出土の機部材の分析により、弥生～古墳時代には輪状式の無機台腰機が、古墳時代中・後期以降は、直状式の有機台腰機が用いられたことが推定されてきたが、新たに古墳時代後期の栃木県下野市甲塚古墳で出土した機織形埴輪 2 基が公表され、輪状式と直状式の 2 種の腰機が併存したことが裏付けられた。

埴輪の表現をみると、実際の腰機の部材の特徴をよく捉え、忠実に模造されていることが指摘できる。また、機にかかる経糸と織手との関係も明白である。なかでも、注目できるのが、輪状式の無機台腰機を模した機織形埴輪において、「二脚台」の表現が認められる点である。二脚台は、群馬県前橋市上細井稲荷山古墳出土の石製祭器の検討により、機を構成する部品と推定されてきたが、用途は不明瞭であった。

そこで、遺跡出土の木製二脚台の復元模型を用いた織成実験を行い、埴輪にみられる二脚台の表現方法やアジア沿岸地域の民族例との比較等から、その用途について考察した。

なお、機織形埴輪の類例として、新たに茨城県つくば市上境作ノ内古墳において周溝から埴輪片が出土した。本例は、楕円形の基台に腰機の脚とみられる柱が 2 本並立し、片方の柱の内側に経糸の開口操作を行うための「足縄」の表現がみられる。この足縄の表現から直状式の有機台腰機を模したものであることが明らかである。関東とその周辺地域では畠作優位の気候条件のもと、麻栽培と布生産が盛行していたことが文献史料からも知られるが、これら機織形埴輪は古墳時代後期の当地域における麻素材の織物生産の実態を示すものである。



甲塚古墳出土の機織形埴輪

## (2) 技術と生産

《二種の腰機と布の規格》 古墳時代後期に併存した輪状式の無機台腰機と直状式の無機台腰機の技術が、律令制下の織物（特に、麻素材の布）の規格を決定づける要因の一つとなったことを考察した。

律令制成立期の麻素材の調布（端を単位とする布）と庸布（常・段を単位とする布）について令規定をみると、端布の幅は、大宝令制定時の 2 尺 4 寸のまま変わることなく、常布・段布の幅も同様であったとみられるのに対し、布の長さは端布が 5 丈 2 尺、常布が 1 丈 3 尺（段布は 2 尺 6 寸、後に 2 尺 8 寸に変更）と大きく異なる。この布長の差異に着目すると、輪状式と直状式の 2 系統の製織技術に一致することがわかる。

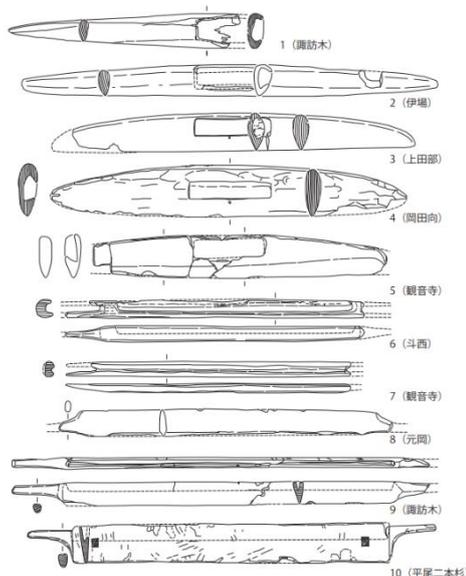
輪状式の無機台腰機で織れる布長は、基本的に織手の足の長さの 2 倍に限られる。一方、直状式の有機台腰機はあらかじめ経糸を長く巻いた布巻具を機台にのせるため、織れる布長は 10 数 m 以上となる。機の操作の利便性も良く、より長い布を効率よく織ることができたと考えられる。

《律令制成立期の調庸布生産の再検討》 調布や庸布として貢納する端布・常（段）布生産について、これまで両者の布長の差異は、ほとんど考慮されることなく、「調庸布」として一括りに論じられてきた。しかし、本来、異なる技術系統にあるはずの端布生産と常（段）布生産とは分けてみる必要がある。そこで、まず、遠江国敷智郡衙に比定される静岡県浜松市伊場遺跡を事例として、直状式の有機台腰機を構成する部材、段布の付札木簡等を再検討し、郡衙を拠点とした端布生産の具体相を明らかにした。

次に、段布の生産と流通について、長野県更埴市屋代遺跡出土の郡符木簡、正倉院に伝わる商布の墨書銘、茨城県石岡市鹿の子 C 遺跡出土の漆紙文書等から、集落で生産された段布が、在地社会で流通し、商布等として転用された背景を読み取った。

また、布幅について古墳時代後期に遡ってみると、2 系統の腰機と高機により、幅 50～60 cm のものが織られたことが、出土部材の分析から判明する。これに関して輪状式の無機台腰機を構成する布送具として、埼玉県熊谷市諏訪木遺跡例等の調査を進め、律令時代までの変化を追った。

さらに、律令時代の集落においてもこの幅の布が家用に織られ、消費されていた可能性を、正倉院に伝わる信濃国の布袋や大阪府高槻市上田部遺跡出土の管大杼等から示した。文献史料に陸奥・出羽国の調庸としてみえる「狭布」（幅 1 尺 8 寸、約 53 cm）は、これに類するものであろう。中央での衣料需要には対応しない規格であったが、一般的な衣料としては十分であり、後述するように、布幅は、織手の身体長による制約内で必要に応じて変えることができる。このことから、令制下、一般的な布幅 50～60 cm よりも、10 数



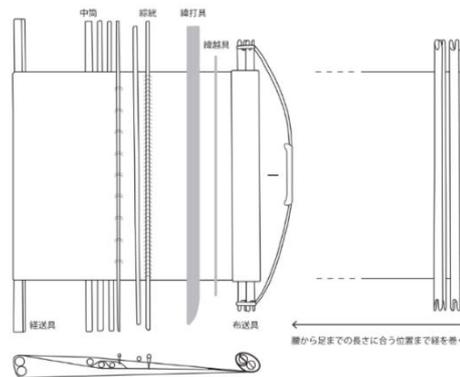
1～5. 管大杼 6～7. 布巻具 8～10. 布送具

腰機の部材

cm広く規定された布を織ることは、織手の技量次第で可能であり、従来想定されてきたほど技術的な隔たりはないと考えられる。

《アジア沿岸地域の民族例と布の規格》 令に規定された布幅2尺4寸(約71cm)までは、身体長による制約を受けないことを、アジア沿岸地域に伝承される腰機の技術を参照し、推察する。国立民族学博物館や西脇市郷土資料館等に所蔵される腰機の調査を行い、機の部材の実測等を進めた。その上で、アジア沿岸地域の腰機をC1型からH3型に分類し、その特徴について考察した。

なかでも、ラオス南部のカトゥの輪状式の無機台腰機は、足で経送具を保持するC1型でありながら、機の部材は100cm台の長さがあり、幅80cmの布を女性1人で織る。また、布長をみると、カトゥや台湾のタイヤルの事例では350~400cmと、通常の2倍の長さの布が織られる。それぞれが独自の方法で経糸を2倍に延長し、機にかけて織る。カトゥの場合、巻きスカート2枚分を一度に織れる(経糸を機にかける作業は1回で良い)というメリットがある。古代日本の「尋布」(尋を単位とし、長さ約175cm)と、その倍の長さである常布との関係を見る上で示唆に富む。



ラオス南部カトゥの腰機

### (3) 技術と女性

麻の栽培から製糸、布の製織は、主に女性の仕事であったことが、『万葉集』の歌により知られるが、機織形埴輪や「大刀自」銘土製紡錘車等の調査、関連する文献史料の検討によりその実態を明らかにした。

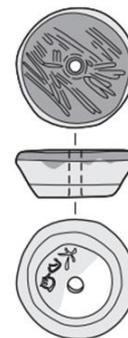
《機織形埴輪にみる女性の織手》 機織形埴輪に表された織手をみると、甲塚古墳例のうち1基は、直状式の有機台腰機の機台に腰を下ろした姿勢で、裾を大きく広げた下衣、頭髮等から女性であることが明白である。もう1基は、輪状式の無機台腰機の経送具に接して筒状の下衣が表されること、左腕に腕輪の剥離痕が残ること等から女性とみられる。また、上境作ノ内古墳例では、円筒の基台に下衣の裾の剥離痕が残ることから、織手は女性と推定できる。

手指で操る麻の糸作りや足腰で支える腰機の技術は、長い年月をかけて体で習得していく。アジア沿岸地域の民族例を参照すると、その技術が女性たちの中で伝承されてきたことがわかる。古代日本においても、母系社会のなかで女性たちが保持し、伝習されたであろう。機織形埴輪は、織物生産がまさに女性たちの労力によったことを裏付けるものである。

さらに、甲塚古墳の人物埴輪の群像をみると、女性像と男性像とが明確に分けて配置され、女性像の中にひととき大きく作られた「首長層女性」と考えられる人物が認められる。2基の機織形埴輪はその「首長層女性」の隣に並び置かれる。機織りが性別分業化された労働であることを象徴するものであり、首長層女性が共同体内の女性たちによる織物(特に、麻素材の布)生産を統率していたことが読み取れる。

《女性による技術伝習と祭祀》 このような古墳時代後期の東国社会における織物生産の形態は、後の律令時代の調庸布生産の基盤となったと考えられる。布の貢納が義務付けられたのは、成年男子であったが、実際に布を織ったのは、麻の糸作りや腰機の技術を伝習してきた女性たちであった。

茨城県稲敷市神屋遺跡で9世紀中頃の住居址から出土した「大刀自」銘の土製紡錘車は、共同体内の女性労働を統率した首長層女性が神格化されたことを示すものとして重視できる。宮中の造酒司で酒甕神として大刀自が祀られたように、女性たちによる紡織の場においても刀自神の形成がなされたのであろう。麻の製糸・布の製織は、女性が変わらず保持してきた生業技術であり、生産労働として統率した首長層女性の神格化と結びつくことで確実に継承されたと考えられる。



「大刀自」銘

福岡県宗像市沖ノ島祭祀遺跡で出土した8~9世紀の金銅製模造品や伊勢神宮等に伝わる紡織にかかわる神宝をみると、麻の製糸具(麻笥、たたり、杵)が多くを占めることが指摘できる。文献史料によると、麻の製糸具は女神に奉るものとしてみえ、首長層女性の神格信仰をあらわすものである。伊勢神宮では、奉斎集団である麻統氏に神衣の料糸として、麻の繊維(「鬘」を単位とする繊維の束)が充てられた。麻統氏が神衣を織るのに、麻の製糸から行う必要があったことは注視できる。この糸績みから撚りかけの工程においてこそ、集団内の女性たちの多大な労力を要したと考えられる。

タテ社会を公式とする律令体制において、女性労働とその生産物である織物は、実地で人や物をヨコにつなげる役割を果たした。公的な史料にはあらわれにくい女性の「隠れた労働」をみつめることで、新たな歴史像の復元ができるだろう。

なお、本研究の成果の一部は、「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺跡群保存活用協議会主催の公開講座(2021年12月、<https://www.youtube.com/watch?v=GJq9zYoIUx0>)、また、復元した輪状式の無機台腰機については、国立歴史民俗博物館主催の企画展示「性差の日本史」(会期:2020年10月6日~12月6日)においても公開する機会を得た。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計11件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 2件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 東村純子	4. 巻 235
2. 論文標題 腰機と女性 - 古代日本の布の規格に関する考察 -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 国立歴史民俗博物館研究報告	6. 最初と最後の頁 387-400
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 村上由美子、東村純子、趙曄、中村慎一	4. 巻 -
2. 論文標題 卞冢山遺跡出土の木器	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 中国江南の考古学	6. 最初と最後の頁 31-42
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 東村純子	4. 巻 753
2. 論文標題 麻と絹、機の技術	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 考古学ジャーナル	6. 最初と最後の頁 3-5
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 東村純子	4. 巻 762
2. 論文標題 古代日本の女性と、麻糸・布生産	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 考古学ジャーナル	6. 最初と最後の頁 6-10
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 東村純子	4. 巻 104-1
2. 論文標題 古代日本の布生産と女性	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 史林	6. 最初と最後の頁 5-36
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14989/shirin_104_1_5	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 東村純子	4. 巻 9
2. 論文標題 弥生時代から現代につなぐ麻糸・麻布づくりと腰機 - アジア諸国の事例から -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 はたやブックレット9 麻の糸・布と腰機	6. 最初と最後の頁 2-23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 織田悠希、東村純子	4. 巻 5
2. 論文標題 博物館における紡織資料の活用 - 紡錘の考古学的研究に基づいて -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 博物館学集報	6. 最初と最後の頁 63-72
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 東村純子	4. 巻 -
2. 論文標題 古代日本の織物生産研究の現状と課題	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本古代とその周辺地域における手工業生産の基礎研究	6. 最初と最後の頁 223-229
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 東村純子	4. 巻 34
2. 論文標題 甲塚古墳の機織り形埴輪にみる古代女性の貢納布生産	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 総合女性史研究	6. 最初と最後の頁 22-35
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 東村純子	4. 巻 3
2. 論文標題 機織り体験学習と考古学教育	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 博物館学集報	6. 最初と最後の頁 40-50
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Junko Higashimura	4. 巻 1
2. 論文標題 Coptic textile technology: skillful combination of linen and wool	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 Proceedings of the International Symposium on "From Perie to Hamada Egypt Antiquities of Kyoto University	6. 最初と最後の頁 62-66
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計10件 (うち招待講演 5件 / うち国際学会 2件)

1. 発表者名 戸塚洋輔、森岡秀人、吉田広、若林邦彦、東村純子、植田直見、小村真理、木沢直子
2. 発表標題 彦根市稲部遺跡出土漆塗繊維製品の調査
3. 学会等名 日本文化財科学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 植田直見、小村眞理、木沢直子、森岡秀人、吉田広、若林邦彦、東村純子、戸塚洋輔
2. 発表標題 彦根市稲部遺跡出土漆塗纖維製品の自然科学的研究
3. 学会等名 日本文化財科学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 東村純子
2. 発表標題 教育資源としての文化財活用
3. 学会等名 全国公立埋蔵文化財センター連絡協議会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 東村純子
2. 発表標題 古代の在地社会における織物生産像
3. 学会等名 木簡学会静岡公開シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 東村純子、魚津知克、松本泰典
2. 発表標題 糸は、なぜ右捻り（S字方向）なのか - 福井県一乗谷朝倉氏遺跡で出土した紡織資料を事例として -
3. 学会等名 日本文化財科学会 第35回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 東村純子、賀来孝代、浦蓉子
2. 発表標題 輪状式の原始機 - 甲塚古墳出土の機織形埴輪にみる新知見 -
3. 学会等名 日本考古学協会 第83回総会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Junko Higashimura
2. 発表標題 Archaeological experiential learning programs using backstrap looms
3. 学会等名 World Archaeological Congress 8 (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 東村純子
2. 発表標題 日韓古代の織物資料を比較する - 素材種類と生産流通 -
3. 学会等名 第10回 新羅学国際学術大会 (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 東村純子
2. 発表標題 古代日本の織物生産と女性
3. 学会等名 総合女性史学会大会 (招待講演)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 東村純子
2. 発表標題 考古学からみた古代日本の紡織
3. 学会等名 TES（繊維製品品質管理士）会、北陸支部 年次大会（招待講演）
4. 発表年 2015年

〔図書〕 計8件

1. 著者名 「ジェンダーの日本史」展示プロジェクト編	4. 発行年 2021年
2. 出版社 集英社インターナショナル	5. 総ページ数 221
3. 書名 性差の日本史	

1. 著者名 国立歴史民俗博物館編	4. 発行年 2020年
2. 出版社 歴史民俗博物館振興会	5. 総ページ数 314
3. 書名 企画展示 性差の日本史	

1. 著者名 総合女性史学会、辻浩和、長島淳子、石月静恵編、東村純子他	4. 発行年 2019年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 336
3. 書名 女性労働の日本史	

1. 著者名 光本順編、金関猛、今津勝紀、中谷文美、東村純子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 岡山大学文学部	5. 総ページ数 42
3. 書名 岡山大学文学部プロジェクト研究「ジェンダーの多層性に関する領域横断的研究」記録集	

1. 著者名 十日町市博物館編、菅沼巨、東村純子	4. 発行年 2018年
2. 出版社 十日町市博物館	5. 総ページ数 13
3. 書名 機織りのムラ 馬場上遺跡	

1. 著者名 浜松市博物館編、東村純子他	4. 発行年 2018年
2. 出版社 地域と考古学の会	5. 総ページ数 267
3. 書名 静岡県と周辺地域の官衙出土文字資料と手工業生産	

1. 著者名 日本植物学会編	4. 発行年 2016年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 830
3. 書名 植物学の百科事典	

1. 著者名 木村茂光、安田常雄、白川部達夫、宮瀧交二編、東村純子他	4. 発行年 2016年
2. 出版社 吉川弘文館	5. 総ページ数 859
3. 書名 日本生活史辞典	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------